

芭蕉連句研究(一)：「升買て」の巻

杉浦，正一郎

<https://doi.org/10.15017/2332899>

出版情報：文學研究. 50, pp.43-54, 1954-12-25. 九州文学会
バージョン：
権利関係：



氣短に針立ふいと帰らるゝ

地のしめるほど時雨ふり出す

雌メの此中うせて一羽鶏

ふり商に棒さげてゆく

船入をあぢに住なす三井の鐘

枯た薪を沢山に焚

人々の尻もすはらぬ花盛

蛆のはづれを雉子うつりゆく

〔住吉物語〕

道 流 蕉 道 流 考 堂 然

この「升買て」の歌仙は稲津青流撰『住吉物語』に収録されてゐるものである。『住吉物語』は刊年不明であるが、採録されてゐる句によつて元祿八年頃の刊行と思はれる。本書には芭蕉・其角・嵐雪・去来・丈草・許六・惟然・土芳・支考等の蕉門作家、宗因・元順・西鶴・調和・任口・素堂・才麿・来山等の談林その他の俳人の作を収めてゐる。斯様に蕉門他流に亘つて名家の作を収録してゐるのは、撰者青流が談林系の人であり乍ら、又蕉門の人々とも親しい交渉を持つてゐたからである。稲津青流は大坂の生まれで、元祿七・八年頃堺に居を移した。俳諧は岡西惟中の門人である。『住吉物語』の彼の句の前書に「芭蕉翁たま／＼にはの声の花ミんとて、きく月にくたりたまふに、おもはすも夢とのミ浮雲むなく、はかなきならひなり。一日吟席のちは余も病床にふし侍りし」とあるのによると、青流が芭蕉と同座したのはこの「升買て」の歌仙の日——元祿七年九月十四日——の一日に過ぎなかつた。然し彼が如何に芭蕉を深く敬慕してゐたかと云ふ事は、その追悼句、及び後の彼の行動によつても明らかであ

る。尙、当時青流は國女・之道・酒堂等の大坂の蕉門俳人とは深い交渉を持つてをり、蕉風俳諧に就いても相當な理解を示してゐた。その後、元祿十四年に江戸に移住して其角に近づき、晋子終焉記や追悼集も編んでゐる。又、彼は深く宗祇の風流をしたひ、正徳四年箱根の宗祇墓前で剃髪して祇空と改号し、各地を行脚したが、享保四年に京都紫野に住して更に号を敬雨と改めた。享保十八年、七十一歳で歿してゐる。

尙、本歌仙制作前後の芭蕉について一言しよう。元祿七年五月八日、次郎兵衛をつれて江戸を出立した芭蕉は、廿八日故郷の伊賀上野に帰り、暫く旅の疲れを休めた後、閏五月十六日伊賀を出、大津・膳所・京に日を送り、七月中旬、盆会の為に再び上野に戻り、惟然・支考等の門弟をこゝに迎へ、九月八日、惟然・支考を共に大坂に向つて伊賀を去つた。当時大坂には酒堂・之道の両雄ををり、二人の中に去り難い確執があつたので、芭蕉は両門人の仲裁かた／＼蕉門勢力の調整を志してゐたのであつた。然し、この度の行脚は芭蕉の健康上好ましいものではなかつた。伊賀で患つた風邪は道中の芭蕉を苦めた。新発見の九月二十五日付曲水宛芭蕉書簡には「伊賀より大坂まで十七八里、所／＼あゆみ候而、貴様行脚の心ためしにと奉存候へ共、中／＼二里とハつゝきかね、あへれ成物にくつをれ候」とこの道中の様が記されてゐる。かうした無理がた／＼つて九日大坂着の翌日から熱が出、ふるひがつき、それも早朝から夕刻まで、而も二十日頃まで続いたのであつた。この歌仙は幾分身体具合の好かつた一日、畦止亭に於いて興行されたものであつて、大坂に入つて最初に成つた歌仙のやうである。而も芭蕉は二十日以後各所の俳席に招かれて、そ

の饗応で再び身体を毀し、二十九日に病臥し、十月十二日に旅寝の夢と消えたのであるから、芭蕉出座の歌仙としては最も晩年に近いものの一つである。

本歌仙は七吟で、連衆のうち惟然・支考は芭蕉が伊賀から供として同行した門弟、酒堂・之道は大坂に居住してゐた蕉門俳人、青流・睦止が同座した理由は明らかでないが、酒堂・之道と関係のあつた人達と思はれる。

この歌仙が興行されたところは長谷川睦止亭であるわけだが、睦止のことは全く不明である。『笈日記』『其便』によると、この後芭蕉は再び九月二十八日の夜、睦止亭に遊んで秋の名残を惜しみ、「七種の恋」を結題にして各々句を詠んでゐる。『住吉物語』には睦止の発句「年寄をまいてのけたるすゝミかな」の句が見えるが、名前の肩書に「亡人」とあるので、この歌仙の後、間もなく死歿したものと考へられる。

升買て分別かはる月見かな 芭蕉

(釈) ○発句。秋(月見)。月の座。○分別 芭蕉には他に「医者のくすりは飲ぬ分別」(『ひさご』『木のもとに』の巻)「分別の外を書かるゝ筆のわれ」(『星合集』『牛部屋に』の巻)等の句がある。分別はもとくは是非善惡のわきまへを云ふが、こゝでは考へと云ふくらいの軽い意味で用ゐられてゐる。

(評) 前書に云ふ「住吉の市」と云ふのは九月十三日に行はれた——現在では十月十七日——大坂の住吉神社の祭りの市のことである。この市は又宝の市とも云はれるが、それは昔、神功皇后が征韓凱旋のみぎり、その貢物の一部を庶民に頒賜したことを記念

して行はれたからとも、又この市には種々の市人が群集するからだとも云はれてゐる。而も昔は神前へ黄金の升を造つて新穀の稲を献じたので、それにあやかつて農家相手に大小様々の升がこの市で売買され、升の市とも云はれた。尙、元祿七年九月廿五日付の膳所の正秀宛芭蕉書簡にはこの句が記された後に「巷合ます一ツ買申候間かく申候」と述べられてをり、実際に芭蕉がこの市で一合升を買つた事を知り得るのであるが、それもこの市で升を買ふと幸運にあやかると云ふことに興じたものであらうと思はれる。

擬て、九月九日夜、終焉の土地難波に杖を曳いた芭蕉は、伊賀で患つた風邪と道中の無理がたゞつて翌十日から熱に襲はれたのであり、早朝から夕方まで、熱や頭痛に苦んだのであつた。斯うした状態は二十日頃まで不連続的に続いたのであるが、十三日は些か気分良好であつたので、十三夜の月見がてら住吉の市に足を運んだのであつた。ところで本歌仙の前書にはこの住吉の市の帰途、長谷川睦止亭で月見が行はれ、この「升買て」の歌仙が興行された如く記されてゐるが、難波の旅泊中ずつと芭蕉に随行した支考の『笈日記』には「今宵は十三夜の月をかけて、すみよしの市に詣けるに、昼のほどより雨ふりて、吟行しづかならず。殊に暮、くは惡寒になやみ申されしが、その日もわづらはしとて、かいくれ帰りける也。次の夜はいと心地よしとて、睦止亭に行て、前後の月の名残をつぐなふ。住吉の市に立てといへる前書ありて、升買て分別かはる月見かな 翁」と見え、之によると事實は、十三日は午後から雨降りとなり、且つ風邪熱が出て不快になつて住吉からそのまゝ旅宿に帰つたのであり、その翌十四日の

夜、前夜の月の名残を求めて畦止亭を訪れ、その座でこの「升買て」の歌仙が興行されたのであつた。つまりこの前書には文飾が加へられてゐるわけである。

ところでこの発句に就いては、同じく支考の『梟日記』に前引正秀宛芭蕉書簡に掲げた後に「分別かはるといふ中の七文字見がたし。発句は殊更その人の身にあてゝ見るべし。升といふ物は世帯の道具なるに、此升かふて後は鍋もほしく桶もほしく、世の中の隠者此筋よりあやまる事を人の鏡には申されし也」と述べ、この句から教訓の意を汲まうとしてゐるのである。然しこの句は頼原退蔵博士が「その夜月見が出来なかつた事を、升を買つた事に託して寧ろ軽く興じたのである。即ち月を見ようと思つて出かけたのであるが、途中で宝の市に立寄つて小升を買つたら急に世間並の世帯氣が出て歸つてしまつたといふのである」(『芭蕉俳句新講』)と記されてゐる如く解すべきである。恐らく十三夜、畦止亭で月見の吟席を催すことは畦止に約束されてゐたものと思はれるが、その当夜悪寒と雨の為に訪問を中止したので、言訳を前三日住吉の市で求めた小升に託けて詠んだのであらう。月見をしようとして来たが、住吉の市で升を求めたところ、急に世帯心が起つて考へがかはつてしまつたので、昨夜はとんと失礼してしまひました、と云ふ主人畦止への挨拶がこめられてゐるやうである。尙、この句は前掲の『笈日記』『梟日記』の外に『芭蕉翁行状記』『喪の名残』『泊船集』『宝の市』等の諸集に同形で収められてゐる。

秋のあらしに魚荷つれだつ

畦止

(釈) ○脇句。秋(秋のあらし)。○秋のあらし 秋風よりもやつよく、野分よりも幾分弱い程度の秋季に吹く風。○魚荷 ふり売りの荷でなく、漁村漁船などから都市の魚問屋魚店に運ぶ魚荷である。用例、「どし／＼と魚荷の登る月の影 舎羅」(『蓑笠』)「上から下る魚荷の戻り、歩き歩きの高咄し」(『淀鯉出世滝徳』)。(評) 句意は明瞭なる如く、魚荷を荷ひ棒で前後に担つた人々が、秋のあらしに頭髮や衣服を吹き乱され乍らつれだつて行くと云ふのである。これは住吉神社前の海岸によく見られた景である。発句の世帯氣が起つて風流事を思ひ留まつたのですと云ふ挨拶に答へて、さもありませう、秋のあらしに吹きつけられ乍ら魚荷運びが連れだつてあゝして行くのも、皆んなくらしが大切だからではありませんか、と亭主の畦止が挨拶の意をこめて応対したものと思はれる。尙、『元禄戊寅歲旦帳』の「東風吹けは猿引とものがつれたちて」の風国の句は、この脇句と一脈通ずるものを表してゐるやうである。

家のある野は苅あとに花咲て

惟然

(釈) ○三句目。秋(花野)。

(評) 『毛吹草』に花野は中秋の部にあげられ、『連歌隨葉集』では秋部に「草枯に花の残る」と見える如く、花野と云ふのは草枯れた中秋の野に咲く野菊・龍胆・女郎花・萩等の野花を総括して云ふのである。擬て、寂しいなりにも人家の建つてゐる野原には、枯草を刈り取つたあとに草花があたかも植ゑた如くに可憐な花を咲かせてゐる。前句の魚荷の通つて行く場所を描き出したのである。発句脇句とも人事句で難波市中のことであつたのが、こ

の第三句でうまく転ぜられて田舎の野の景となつたのである。作者惟然(ただかな)は美濃国関(みのくに かん)の人。元祿元年(1688)頃芭蕉(ばしやう)に入門し、初号素牛(すうぎゅう)、元祿七年(1694)初め惟然(ただかな)と改めた。芭蕉歿後(ばしやうが歿した後)風羅念仏(ふうらねんぶつ)をとなへて諸国(しよこく)を行脚(ぎやく)し、発句(はつこ)に於ては口語調(こうごてう)の特異(とくい)な一風(いつふう)をひらいた。宝永八年(1801)に歿した。

いつもの癖にこのむ中服 酒堂

(釈) ○第四句。雑。○中服 不詳。茶事に關係のある言葉であらうか。

(評) 中服の語を明らかにする事が出来ない為、句意も解し難い。中服の語は辞典類にも見出し得ないし、且つこの他に用例を寓目(うきめ)しえない。若しかしたら茶道の上で、お茶をたつぷりほしい時に「大服にいただきたい」などと言ふごとく、その「おうぶく」に対して、中量を「ちうぶく」と、言つたのであらうか。中服をかく解すると、前句の閑静な平和な田舎に住んで、草花などを愛でゝ日を暮してゐる人の様をこの句は描いたのではなからうか。作者酒堂(しよたう)は浜田道夕(はまたみちゆ)と云ひ、近江膳所(おうみ だんじよ)の人で医を業とした。元祿二、三年頃芭蕉の門に入り、初め珍夕(ちんせき)と云ひ、三年、早くも『ひさご』の撰者となつた。元祿五年夏頃酒堂と改め、翌六年夏に大坂に移住し、元祿十二、三年頃再び膳所に帰つた。元文二年に歿した。

頃日となりて土用をくらしかね 支考

(釈) ○第五句。夏(土用)。○土用 易の五行によつて木・火・金・水を一年の四季に当てはめ、各々七十二日づゝとして、各季

のあとにそれ〴〵十八日乃至十九日を土用としておいた。で、土用は一年に四回あるわけであるが、俳諧では専ら夏の土用を意味する。新暦では大抵七月二十日から約十八日間がこれに当り、一年を通じて最も暑熱の盛んな時期である。

(評) 土用に入つて数日たつたが、愈々暑さは烈しく、その土用の暑さに暮しかねてゐると云ふのである。前句を隠居でもしてゐる老人の様ととり、さうした老人が土用の暑さに苦んでゐると付けたのである。作者支考(しこう)は美濃国の人で各務氏、元祿四年頃から芭蕉に従つた。芭蕉歿後は諸国を遍歴してその勢力を詰め、美濃派、又は獅子門と謂はれる一派を起した。享保十六年に六十七歳に歿した。

榎の木の枝をおろし過たり 之道

(釈) ○第六句。雑。○榎の木 高さ三四丈にも至るニレ科の落葉喬木。次の「つくぐ」と榎の花の袖(そで)にちる 桐葉(きりぎりす)「独り茶をつむ數の一家 芭蕉」(『熱田三歌仙』)「藁もちよりて屋根葺にけり 胡及」(『木の葉ちる榎の末も神無月 鼠弾』(『秋の日』)等の俳諧によつて理解される如く、榎の木は田舎の人家の近くに植ゑられ、夏季緑蔭を提供した。そして榎の木は俳諧に屢々見出し得るごとく、俳人達が親愛感を持つてゐた樹木の一つであつた。

(評) あまり葉が繁つて薄暗いので枝をおろしたところ、暑い真夏の太陽が枝葉を通して照りつけるので、どうも少し枝をおろし過ぎた様だと云ふのであつて、前句の土用を暮しかねてゐる原因を持ち來たつたのである。少々付き過ぎてゐて余り上手な付合とは云へないやうである。尙、作者之道は槐本氏、大坂道修町の藥

種屋伏見屋久右衛門と言ひ、元祿三年頃芭蕉の門に歸し、元祿八年諷竹と改号した。大坂蕉門の有力な俳人の一人で宝永五年に歿してゐる。

溝川^ヲにつけをく筥を引てみる 青 流

(釈) ○初裏第一句。雑。○溝川 水をひくために設けた小川。井溝とも云ふ。用例「昼の水鶏のはしる溝川 芭蕉」(『炭俵』空豆の)の卷) ○筥(ウケ) 細い竹を底無し徳利のやうな恰好に編み、しりをくゝつて川に浸して魚を獲るもの。

(評) 魚を獲るために溝川につけておいた筥を、魚が入つてゐるかどうか引てみたと云ふのである。前句の榎の木の枝をおろし過ぎたと云ふところから、何んな事でも手を出す、まめな男を点出したのであつて、溝川に筥をつけては魚を獲つたりする身体がよく動く男なのである。尙、引てみるの語は前句のおろし過たりの語に響いてゐるやうに思はれる。

火のとぼつたる亭^{ちん}のつきあげ 蕉

(釈) ○初裏第二句。雑。○亭 ちん 茶室。○つきあげ 突上窓。鴨居に戸の上端を鴨番などで取付け、下端を棒でつきあげて開けるやうにした窓。

(評) 筥をつけた溝川が清らかに流れて行く、向ふの樹木の茂つた庭園の泉水にでも注ぎ込んでゐるのであらうか。眺めやると、はや宵闇がせまつて、夜の燈火が点ぜられたのか茶屋の突上窓の障子に灯のかげが煌めいてゐる。

蓋とれば碗のうどんの冷返し 止

(釈) ○初裏第三句。冬(冷返し)。

(評) こんどは茶室の内部に情景を移したのであつて、茶室に灯がともされてゐるのは来客があつての事とみたのである。久方振りの遠来の客であらうか。主客の談話は尽くることなく時は移つて、すゝめられて蓋をとつたところ、碗のうどんはすっかり冷えて返つてしまつてゐた。擬てこの句は雑の句かとも思へるのだが、「頃日と」の句が夏、後の「照つけて」の句が夏で、同季が六句目に出てゐることになり、同季は七句去ると云ふ式目にあはない。それで、この句は冷返しで冬の季と解すべきものと思はれる。

坂下りてから一里程来る 止

(釈) ○初裏第四句。雑。

(評) この句は非常に軽く付けられてゐる。俗に云ふ遣句であらう。前句のうどんの冷返つたと云ふことに時間の経過を見取つて、やゝ急であつた坂を下つてから暫く時間がたつたが、一里ぐらい歩いて来たであらうと云ふのである。『猿蓑』に

吸物は先出来されしすいぜんじ 芭 蕉

三里あまりの道かゝえける 去 来

の付合があるが、この方は出された料理からこれからの旅程を思ふのである。参考までにあげておく。

照つけて草もしほるゝ牛の糞 堂

(釈) ○初裏第五句。夏(照つけて)。

(評) 情容貌もなく照りつける真夏の太陽に、道端の牛の糞はか

らからに干からびてゐる。道の辺の雑草もさながら萎れてしまつてゐるやうである。これは前句の道を歩いていく旅人が見た道中の様であらう。前句の一里程来るの言葉に足の進め難い旅の様を感じて、炎天の一景で応じたものと思はれる。

村の出現世に集て寝る 考

(釈) ○初裏第六句。雑。

(評) 町の商人が村に設けてある出店に集まつて寝ると云ふのであるが、集て寝るのは誰であらうか。勿論、村の若い衆、青年達であらう。そしてこの句は俗に若衆組、若者組と云はれる農村の民俗学上の行事を表現したものゝ様に思はれる。柳田国男氏監修の『民俗学辞典』の若者組の項には詳細な説明が見える。同書によると村の青年男子によつて組織されてゐた年齢層による集団で、村におけるいろ／＼な事に關係してゐたらしいが、特に祭祀と婚姻とに対しては深く関与してゐたと云ふ。そしてその生活の中心として若者宿・寝宿・泊り宿・若い者部屋などと云はれる集会所を持つてをり、それには常設のなところや、村の有力者や気の置けない若夫婦の家などを適当に使用し、農閑期など夕食後こゝでいろ／＼な仕事をしたり、力くらべや女の品定めなどを行つたと云ふ。この付句はさうした若者宿に出現世を使用し、こゝで組の青年達が集つて寝てゐるのではなからうか。真夏の暑い夜など夕すゞみに青年達は集まつて、たわいもない談話を夜を過ごしてちであつた。

嫁とりは女計で埒をあけ

蕉

(釈) ○初裏第七句。雑。恋の句(嫁とり)。

(評) 前句の若衆組に対して今度は娘組を持ち来たつたのである。娘組は柳田氏の『民俗学辞典』によると村の未婚の女子の集まりで、特に婚姻との關係は深く、後には婚姻の開始のためにのみ便宜を供する様になつてゐたが、もと／＼個々の家長の管掌せぬ性の事項を全部処理すべき場所であつたやうであると云ふ。で、こゝでは婚姻のことで何か問題が起つたか、或は縁組の話でも起つたのを、娘組の連中がいろ／＼働いて、うまく事を処理してしまつたと云ふのであらうか。あるひは又、息子の子をむかへるのに、父親や祖父・兄などは余り関与せず、母・祖母・姉など、女ばかりで処理したといふのであらうか。前句の話題になる縁組をつけた。

大事がる子の秋の霜やけ 流

(釈) ○初裏第八句。秋(秋の霜やけ)。

(評) 前句の嫁取りのことも女ばかりでうまく取計つてしまつたと云ふことから、大事に育てられた長男の甚六とか一人息子の事を想起したのであらう。さうした大事がられる子供は秋になつて少し寒さが続いたら、もう手足に霜やけをこしらへるやうな弱い子供が多いのである。

汁の実を又呼かへす朝の月 道

(釈) ○初裏第九句。秋(朝の月)。月の定座。○汁の実 味噌汁などに入れる実、浅利貝や豆腐、油揚げ等。

(評) 淡い月のかゝつてゐる早朝、先刻、汁の実を求めようとして振り売りを呼び止めたものゝ、思ひ直してやり過ぎたのだ

が、再び考へ直して遠くから秋の冷い空氣の中に汁の実売りを呼びかへすのである。汁の実を求めるのにさへ斯う逡巡するものも、未だ尙眠つてゐるのであらう愛し児を朝餉の膳に喜ばせてやらうと思ふからであらう。

薄の中へ蟾のはひ込 止

(釈) ○初裏第十句。秋(薄)。

(評) この句は前句の振り売りの通つて行く情景の連続であらう。月の光りも淡くなつた秋の朝、爽やかな空氣を破つて汁の実売りが大声で呼び歩いて行く、その声に驚いた様に急に道傍の草村から蟾が現れて一叢の薄の中に這ひ込んで行つた。ところでこの蟾の季であるが、現在夏は夏の季語とされてゐる。これは芭蕉の『奥の細道』の「這出よかひやが下のひきの声」の句以来のことゝ云はれてゐる。この句は元來かひやの方が季語と思はれるのであるが、蟾を季語と考へるところから夏の季として用ゐられる様になつたものと思はれる。『初懷紙』に「友よぶ蟾の物うきの声」と云ふ付句があるが、これは雉として使用されてゐる。こゝでも蟾は雉の季として用ゐられてゐるのであらう。

窠ふせてそれからあそぶ花の陰 考

(釈) ○初裏第十一句。春(花の陰)花の定座。○窠ふせる 苗代に窠種をおろすこと。用例「窠ふせたなら京へ飛へさう」朱拙「〔菊の道〕」

(評) 季移りの句である。前句秋であつたが蟾は春も末頃から姿を見せるものなので、晩春の景と取り成したのである。農家では

苗代作りが済んだので、杜の境内などで花見に興じてゐるのである。ところで九州では花見は新暦の四月上旬、苗代作りは五月上旬なのでこの二つの行事の間に一ヶ月のずれがある。然し萩時は中央部で八十八夜前後が適當とされてゐるので、遅桜の頃にならぬことはない。この作者支考は美濃の人なので、美濃の山間部などでは或は花見頃に萩時が行はれてゐたのかも知れない。尙、この句の季移りは前句の薄に無理がないこともないが、薄を春の枯れ果てた折れ薄とみれば良いわけで、蟾を晩春の蟾と取り成したのは將に適當であらう。こゝは花の定座なのであるが、前句秋の季なので実は少々支考も困却したものであらう。

おり／＼たへぬ春の旅人 堂

(釈) ○初裏第十二句。春(春の旅人)。

(評) 山村の花見をしてゐる杜の傍の道を旅人が通つて行く。麗らかな春日和、旅人の様子も至つてのんびりしてゐる様である。二三人続いたと思つたら暫く途切れ、又一人二人通つて行つた。たへぬは絶へないである。折々旅人が通つて、人の歩みが間遠に絶へないで續いて行くのである。

暖に浜の薬師も明ひろげ 然

(釈) ○名残表第一句。春(暖に)○薬師 薬師如來、こゝは薬師堂のこと。

(評) こゝは前句の春の旅人が通つて行く場所を付けたのである。海浜の松原の中でもあらうか。打越しは農村であつたのが海浜に転じられたのである。青松白砂のほとりにある薬師堂も麗

や窓が明けられて潮風を一杯呼吸してゐるやうである。

しるし見分て返す茶筵

蕉

(釈) ○名残表第二句。雑。○茶筵 茶を揉んだり干したりするの
に使用する筵。用例「茶むしろのきはつく上に花ちりて子
珊」(『炭俵』)

(評) しるしは見覚えになる何かであらう。貸りて来た茶筵を目
じるしによつて返却すると云ふ句意である。しるしを見分けるの
であるから相当沢山茶筵を集めたものと思はれる。前句の明ひろ
げを薬師堂の御開帳と見たのであらう。開帳の日には遠方から参
詣人がある。又さうした人を相手に筵などを敷いて休憩所を設け
茶湯を供した。この茶筵も恐らくその様な敷物にでも使用したの
であらう。

めつきりと油の相場あがりけり

流

(釈) ○名残表第三句。雑。

(評) 随分と油の相場の値段が高くなつたと云ふのである。この
付句少々付合が理解し難い。茶筵を貸りて来たのも油の相場が高
くなつたので、倉にでも仕舞つてあつた菜種を売払はうと思つて
日に干した、然し筵が足らないので隣から間に合はせに茶筵をか
りて来たとしたのであらうか。或はそれ程深くとらずに、前句に
景気を見取つたのであらうか。

又どこへやら羽織著き行く

道

(釈) ○名残表第四句。雑。

(評) 羽織著て行くのは油問屋の旦那であらう。恐らく仲間の寄
合に足を運ぶものと思はれる。又、の語に油の値段が急に高くなつ
たので、旦那も多忙であることが覗はれる。

名号をようみせたとて樽肴

堂

(釈) ○名残表第五句。雑。○名号 南無阿彌陀仏を云ふ。こ
ゝではその名号を誰れか著名な上人でも書き記したものであら
うか。西鶴の『世間胸算用』にも「日蓮上人自筆の曼荼羅を、か
ね／＼宇治に望ミの人ありて、金銀何程成ともと申されしに、其
ときへ売おしく、当くれ手前さしつまり、はる／＼うりはらひに
参りしに、此人いかなるゆへにや、分別替りて浄土宗になられけ
れば、此名号手にもとられず、思ひ入ちがひまして迷惑いたすな
り」と見える。

(評) 前句の羽織を著て行く人を、信心三昧に老後を送る隠居な
どの様とみたのであつて、さうした隠居が秘蔵してゐた大切な名
号を見せてくれたお礼に、酒や肴をつかはしたのであらう。

竹橋かくる山川の末

考

(釈) ○名残表第六句。雑。

(評) 名号などを秘蔵してゐる山寺の窓外の景である。竹橋かく
るは隠れるでなくて、山川の狭くなつたところに竹の橋が架して
あるのである。竹の橋に人気遠い山寺の趣が感じられる。

大根も細根になりて秋寒し

蕉

(釈) ○名残表第七句。秋(秋寒し)。

(評) 前句の竹橋、山川などから山国を想起したのである。ついでこの間種時きしたと思つた大根ももう細根にはなつたやうだ。それとともに秋も更けて殊に寒さが身にしみるのである。細根と秋寒しが微妙に一句の中で匂ひ合つてゐて、まことに芭蕉らしい情趣の溢れた句である。

若狭恋しう月のさやけさ

然

(釈) ○名残表第八句。秋(月のさやけさ)月の座。

(評) 秋も寒さが感じられるやうに更けて行くにつれ、月の皎々たる輝きも一段とさやけさを増してゆく。物凄いくらいに蒼白い光りのさす月。その月に眺め入るうちに遠く離れた若狭の国が一入恋しう思はれてくるのである。月の光りは人を懐旧に誘ふものであつて、明るい月光を眺めるにつけても若狭が偲ばれてならない。この句には何か浪漫的な物語を取つてゐるのではないかと思へるが明らかにし得ない。然し、当時京大坂などに出稼ぎに出てゐた者は江州・丹波・若狭の人々が多かつたので、若狭を持ち来つたものかも知れない。若狭大根と云ふ、土産物は文献に見出し得ないが、この頃、上方には若狭の大根など相当出廻つてゐたと思はれるから、前句の大根が意識の底にあつて、それが契機となつて若狭が連想されたのであらうか。

ゆるされて寝れば目がすむ夜永さよ

止

(釈) ○名残表第九句。秋(夜永さ)。

(評) 商家などに雇用されてゐる下女・下男の境遇である。夜も更け、主人から許しが出たので寝はしたが、明るい月光が窓から

射し込んでなか／＼寝つかれない。月から故国の山河や、肉親・友だち・恋人と親しいものゝ影が次々と脳裏を駆けめぐつて行く、さうしたものを追ひ払つて眼を結んでもその幻影が再び去来する。眠らうと意識する程、眼がさえる。そして夜が徒らに長く思はれるのである。

半造作でまづ障子はる

堂

(釈) ○名残表第十句。雑。

(評) 家の造作はまだ終らないのに、完成の時が待ちきれないのか、もう障子などに紙を張つてゐる。前句の許されて寝たがなか／＼眠れない人、さうした人を気性のはつきりした何んでもてきばきと片付ける人と思、その氣分で家が出来上らないのに障子を張る人柄を付けたものと思はれる。

氣短に針立ふいと帰らるゝ

道

(釈) ○名残表第十一句。雑。

(評) 針立は『春の日』の「春めくや」の歌仙の付句に「いともしき五位の針立 昌圭」とある如く鍼医者である。その針立が接待か待遇に氣に入らないことがあつたのか、ぶいとお歸りになつてしまつた。帰らるゝは敬語である。当時、針立導引は医者的一種として社会的地位に於いては相当重んぜられてゐたのである。かの伊丹の鬼貫は針立導引を業としたと云はれてゐる。前句の造作半ばに既に障子を張ると云ふのに、氣短い感じを見取つたのである。

地のしめるほど時雨ふり出す

流

(釈) ○名残裏第十二句。冬(時雨)。

(評) またく間に地面がしめる程時雨が降り出したと云ふのである。前句の針立にふいと帰られた後のわびしい空虚感に、時雨のわびしいさびしい感じが応じてゐるのであらう。

雌の此中うせて一羽鶏

蕉

(釈) 名残裏第一句。雉。○雌(めんどり)。此中(このぢゆう)近頃、最近。

(評) 突然時雨が降り出した。その時雨が降りそぐ鶏小屋、小屋の中には近頃雌鶏がゐらなくなつて、雄鶏が唯一羽時雨のわびしさにたつてゐる。

ふり商に棒さげてゆく

道

(釈) ○名残裏第二句。雉。○ふり商 ふりあきなひ、振売りとも云ふ。『炭俵』に芭蕉の「振売の鴈あはれ也多びす譚」の句がある。物を提げたり、担つたりして声を立てゝ売り歩くことである。触れ歩くことからきたのであらう。○棒 俳諧に現れる「筐」とを棒に付たるはさみ箱 臥高(『続猿蓑』夏の夜や)の巻)

「中汲の酔も仄に棒提て 酒堂」(『桃の実』「水鳥よ」の巻)等の句の棒は担ひ棒のことである。棒さげてのさげに就いては柳田国男氏は『俳諧評釈』の前掲「中汲の酔も」の解に「担ひ棒を手にさげてゐるのである」と述べてゐられる。然し手にさげると解するとこの「ふり商に」の句意が少々不明になる。これは棒を携へて行く、つまり肩にして行くのである。斯う解すると「中汲の酔も」の句意もはつきりするであらう。

(評) 句意は行商に天秤棒を肩にして出かけて行くと云ふのである。鶏小屋の側を通つて行くのであるが、その振売りはそこを通る度に小屋を覗き込んでみる。一羽鶏の淋しい様子を気にしてゐるのであらうか。

船入をあぢに住なす三井の鐘

流

(釈) ○名残裏第三句。雉。○船入 船間(ふなば)に次ぐ語で、船が港につくこと。用例「名物の淀鯉・水車あり、川岸の舟入眺めつづけて」(『一目玉鈴』)

(評) あぢに住なすと云ふのは船が入港するたびに巧みにうまく商売を営むと云ふのである。三井の鐘は三井寺の晩鐘であつて、こゝでは大津の港を思はせる為に用ゐたのであらう。昔は若狭の国で獲れたぶり・えびなどを山越で琵琶湖の北岸に出し、こゝから舟で大津の港に運び、再び山越して京に運び入れたのである。で前に出た若狭が作者青流の脳裏に潜在意識としてあつて、そこから大津の港が連想されたものと思はれる。付合ひは前句の振り商ひが商売してゐる場所を考へたのであらう。

枯た薪を沢山に焚

考

(釈) ○名残裏第四句。雉。

(評) 前句の商売繁昌で賑やかな豊かに感じたもので、そんなにくなくて良いものを、枯れた薪を惜し気もなく盛んに燃してゐると云ふのである。

人々の尻もすはらぬ花盛

堂

(釈) ○名残裏第五句。春(花盛)。它ひの花。

(評) 所謂匂ひの花の座で、花盛りを出したのである。爛漫と咲き乱れる桜花、麗らかな春日和の上に花盛りともなれば、人の尻も落着くまい。前句のやゝ陽気な感じを受けたのである。

岨のはづれを雉子うつりゆく

然

(釈) 揚句。春(雉子) ○岨 そば、がけ。断崖。

(評) 雉子は春の鳥で良く花の盛りに見られるもので、こゝに付けられたのである。賑やかに飲んだり食つたりしてゐる花見の場所、そこからやゝ離れた崖を雉子がとんで行くのである。

『続猿蓑』に「花のかげ巢を立雉子のなきかへり」と云ふ沽圃の付句もある。尙、雉子はあの姿態の為か、揚句によく用ゐられてゐて屢々見られる。

◇

◇

扱て、一卷全体を眺めてみるに、この歌仙には『猿蓑』的な濃艶な恋の句もない。旅の句も、「おりくたへぬ春の旅人」の句が一句で、漂泊流浪の詠歎もない。又、以前良く見られたすさまじい修羅場もない。勿論、古事、本説取とみられる句もない。すべてが日常卑近な事物によつて諷はれ、庶民の風俗詩とでも云ふべきものとなつてゐる。あの『ひさご』『猿蓑』時代の華やかさは消え失せてしまつて、淡々とした淡い黄昏の美を志向してゐる様に思はれる。こゝに諷はれた風俗詩的な味ひ、それが芭蕉が晩年に求めた「軽み」の風調であつて、彼の所謂「高悟帰俗」の言葉そのまゝ、高く悟つた芭蕉が最後に帰着した平俗の境地であつ